

## ◆リーマン×リーマン◆（試し読み）

俺の趣味。後輩の尻拭い。

「先輩でデキる男ってかんじですね」

んなわけねーだろばーか。

いやちがう、んなわけねーなのは冒頭。俺の趣味がデキの悪い後輩の尻拭いっつーたわけた寝言略してたわごと。俺はデキる男だ。とぎたてナイフのようにキレル男だ。あ、キレルつても十代にありがちな現代の風潮じゃねーぞ、頭が切れるのほうだからな。まあそつちも否定しないけどよ。後輩の弾んだ寝言は気分悪いから無視してやった。

なーが「先輩ってデキる男ですね！」だ、調子こいてんじゃねーぞ。おだてて機嫌とろうつて下心がみえみえなんだよ。なんで俺が夜遅くまで残業してると思ってたんだ、どっかの馬鹿でデキの悪い後輩のせいだろうが。

イライラとキーを打つ。

捨て鉢やけつばちな指の速度に合わせて打鍵の音が散弾銃のように響く。

ダダダダダツ、読点連打。

眼精疲労のせいかな、網膜でオレンジの光輪が点滅する。

眼鏡のレンズが液晶のあかりを反射して灰白く染まる。

画面に表示される字が霞んでとらえにくい。

くそ、また視力がさがったか？

「前から思ってたんですけど、先輩」

「なんだよ」

「眼鏡、度が合っていないんじゃないですか？」

……人が気にしていることをずばりと言いやがった。

反射的に聞き返して後悔する。こいつはさっきから人の神経逆撫ですることしかしねえ言わねえ無自覚の困ったちゃんだ。その困ったちゃんの面倒見役として残業に付き合う俺は薄幸と哀愁のサラリーマンだ。

てめえの無邪気な言動と能天気な笑顔が不興を買ってる自覚はさっぱりねえのか、後輩の余計な指摘に、眉間がびくびく引き攣る。

「不況のご時世、人員削減された分一人あたりの仕事時間がのびて、おちおち眼鏡新調にいく暇もねーんだよ」

「それは大変だ。早くかえないと、ますます視力が落ちちゃいますよ。画面見詰めてる時間が長い職場なんですから」

「眼球の心配してくれてどうも」

これだよ。ちよつとは空気読めよ先輩。俺の視力がさがったらお前のせいだよ何分の一かは。俺が定時退社を返上してパソコンとにらめっこしてんのはどこのどなた様のせいでしょうか？ と、イヤミな敬語で聞いただしてえ。

部署には俺とこいつふたりつきり。他の連中はとつとと帰っ

ちまった。連れ立つて飲みに行く遊びにいく独り者、真つ直ぐ帰宅するマイホーム組、課長とその腰巾着の係長は今週末のゴルフの相談しながら仲良く退社なさった。今は無人の課長と係長の机を忌々しく睨み付ける。

煌々と空疎な蛍光灯が照らす室内には整然とデスクが並び、俺達が使うパソコンの音だけが空気を介して微弱に鼓膜を震わす。

ああ、損だ。貧乏籤しいてはっかだ、俺。早く帰らせてえ。ずつと座りっぱなしでいい加減腰が痛い、肩こった。暇もこった。二十代でこんな疲れでどうなるんだ？ 三十代

四十代になったときのことを考えるとおそろしい。大口かっぴろげてあくびの拍子に、乾いた眼球を湿そうと

勝手に涙腺がゆるんで涙が出てくる。

「薄情な連中だよ。一人くらい手伝い申し出てもいいじゃねーか。部下の失敗は上司の責任って言葉は廃れたのか？ 係長のヤツ、俺一人に押し付けやがって……」

そりや、俺にも責任の一端はあるけど。

まさか。ちよつと目をはなしたすきにあんな大惨事が発生するなんて、だれが予想できた？

椅子に自重をかけ、振り向く。

俺のデスクの真後ろ、こつちに背中を向けてどこか上機嫌に残業に勤しんでいるのは、ぱりつとスーツを着こなす若い

男。

「お前もさ、入社半年も経てばわかるだろ。シュレッダーにかけていいものとかけちやいけねーものの違いくらいさ。ちゃんと判おしてあつたら、赤いのが。重要書類の。一番上の隅っこに」

「近眼なんです、僕」

「……おい」

低く険悪な声で唸る。

男は軽薄に肩をすくめる。

「冗談です。いえ、本当反省してます。僕の注意不足で先輩にまでお世話かけて、申し訳ないです」

今度は素直に謝罪する。

椅子を軋ませ、こつちを向く。

誠実な二枚目が、はにかむような実感じのよい笑みを浮かべていた。

「営業の基礎がなってるねー」

こいつに外回りはまかせられねえ。こんなにやついたつらで謝られたら、俺なら絞め殺す。

現に今、手、疼いてるし。

絞殺の衝動に疼く指を開閉しつつ、込み上げる怒りを抑えた声で指摘する。

「謝るときは、嘘でも眉八の字にしろ。しまりねえ顔で謝

られても説得力ねえよ、余計に腹たつ。相手が俺だからいいが、お前、商談先でそれやってみろ。即刻クビだぞ」

「あ、だからですか。ぼく、あんまり外回り連れてつてもええなくって」

世の中なめてやがる。

頭痛の発作にこめかみを押さえ、うつむく。

人さし指でこめかみをつつき頭痛の波が去るのを待つあいだ、向き合った男を、ストレスに煮え殺されそうな目つきで観察する。

こつちに椅子ごと向き直り、「あ、だからですか」といけしやあしやあ言い放つ男は、俺の部下。いや、後輩。肝心の俺が顎で部下を使えるほど大層なご身分じゃねえ。入社二年目、ようやくとひよこにトサカが生えたレベルの底辺社員なのだ。こいつは今年入社の人で、俺の事を「先輩」「先輩」と黄色いくちばしでびよびよ慕ってくる可愛い後輩……

じゃねえ。

数時間前に目撃した悲劇を思い出し、悪化した頭痛がこめかみを締め上げる。

「いいか、千里。俺、何度も言ったよな。シュレツダーにかける前は必ず書類を確認しろって。どうでもいいものの中に大事なものが混じってるかもしれないから、必ず自分

の目で確かめろって、実地で教えたよな」

「はい、教わりました」

うん、よいお返事だ。俺が保父なら花丸あげよう。

「なのにどうして俺が一週間かけて仕上げたアンケート集計が千切りになっちゃうんだ。いいか？ 一週間、一・週・間だぞ！ 資料揃えて画面とにらめっこしてたことになるまでキー打って、ようやく仕上げた資料が、お前のせいで見事な千切りだよ！ あとは課長に提出すりや終わりだったのー！」

手振り身振りをまじえ非難する俺に、千里は律儀に頭を下げる。

「すいません。ぼくとしたことが気付かなくて……」

いや、こいつひとり責められない、頭ではわかっている。さあ課長に提出しようとして、その時ちょうど時尿意をもよおして、手近のデスクに置きっぱなしにした俺「も」悪い。放置プレイの代償は高くついた。部署を離れたたつた三分のあいだに、お節介な後輩が机の隅にうずたかく積み上げた紙屑をシュレツダーにかけて、俺は廃棄書類とはいざ知らず一週間分の労力の成果をその上にのせて……

結果は、おしてしかるべし。

シュレツダーから排出された薄っぺらい千切りの紙を思い出し、両手で顔を覆う。

「シユレットダーにかけていいのはキャベツだけなんだよ……」  
俺の、一週間の努力が。文字通り紙くずに。

「キャベツをシユレットダーにかけるなんて豪快だなあ。男の料理ってかんじですな」

ガーガー唸るシユレットダーから吐き出された千切り書類は、むかし付き合ってた彼女が得意料理のトンカツに添える用に刻んだキャベツを連想させ胸を締め付けた。

傷心に塩をすりこむ光景だった。

「レンズに指紋がつかますよ」

「うるせえ」

人が青春の思い出に浸ってる時に。

顔からのろくさ手をおろし、椅子を前に戻し、再び作業に戻る。

幸い、三分の二バックアップはとってあった。残り三分の一は……とりあえず、数字を合わせるしかねえ。課長にはあと一日猶予をもらった。明日までに間に合わせるんだ。

辛うじて首が繋がった安堵より、間に合うかどうかの危惧と不安の大きい。

千里は「手伝います」と申し出た。当たり前だ。だからこうして、ふたりで分担して作業してる。パソコンにデータを入力して出力して……さつきから延々それを繰り返してる。

「久住さんの名前って韻踏んで覚えてやすいですね」

「ああそうかよ」

覚えやすいは褒め言葉じゃねえ。

久住宏澄……クズミヒロズミ。俺は自分の名前が嫌いだ。濁音ばかりで発音しにくい。語感も汚ねえし。親はぜってえ語呂合わせでつけたと思う。呪う。

キーを打つ手は休めず、ふと思いついたことを口にする。

「お前だって、チサト・バンリじゃねーか」

後輩は千里万里という。どつちが苗字だか微妙に判断つかねえ名前だ。ついでに性別も。

「仲間ですな」

はしゃいだ声で言う。仲間？ どういう発想だよ。

「きつと、相性いいですよ」

「よくねー」

付け入る余地を与えず、ぞんざいに答える。

千里は課の人氣者だ。

目上の者には可愛がられ、同期に親しまれ、女子社員からはその穏やかな物腰と誠実な二枚目ツラで絶大な支持を与えている。

一方俺は……比較するのもむなしいが、お世辞にもダチが多いと言えない。上司には睨まれ、部下には敬遠され、同期には疎まれる。

いっつもぴりぴりしてる。神経質。余裕が感じられない。近寄りたくない。缶コーヒーのおまけのミニカー集めてそう。給湯所で陰口叩かれてることくらい、知ってる。目が悪いぶん地獄耳なのだ俺は。つか、最後のはなんだ。凶星だよ。会社帰りのコンビニでだぶらないよう缶コーヒー持ち上げで一個ずつ確認してるの目撃されたか？ いいだろ別に、ミニカーはロマンなんだよ。

「俺と相性いい人間なんか、いねえよ」

自嘲と自虐が入り混じった台詞に失笑をまぶし、吐き捨てる。

ひねくれものの自覚はある。口も悪い。付け加えるなら、顔も。目元に険がただよう神経質な細面で、特に眼鏡がまぶしい。コンタクトは体質にあわず、必然的に中学時代から眼鏡をかけているが、硬質なレンズを通した切れ長の目はますます冷え冷えと人の弱点を透視するような眼光を放つ。生来の目つきの悪さ鋭さが眼鏡で緩和されず陪乗される二重苦。

近頃はこれに疲労と不眠による眉間の皺と目の下の隈も加わり、インテリ崩れの高利貸しさながらさすがに容貌に仕上がっている。

時々寝ぼけた頭で洗面所の鏡の前に立って「うわ、人相悪ッ」と呟く位だ。

俺も千里のような感じのいいルックスに生まれたかった。世間の荒波を鼻歌まじりでサーフィンしやがる千里の要領よさが恨めしい、じゃなくて羨ましい。

「別にいいけどな。会社は働く場所であって、遊ぶ場所じゃねーし。プライベートまで他人に合わせるのうぜえし」  
今日だって、別に予定はない。誰かと飲みに行く予定も、遊びに出かける予定もない。

一人のほうが気がらくだ。

今日だって。

出来の悪い後輩がトラブル起こさなきゃ、他の連中が帰った後も、居残りするはめにやならなかったのに。

考え出すと恨み節が炸裂する。

他人にペースを乱されるのが世の中でいちばん嫌いなのだ俺は。

苛立ち紛れにキーを叩き、背中合わせの千里に叱責をとばす。

「千里。お前、ちかくのコンビニまでひとつばしりして、オロナミンC買ってこい」

目の奥で疼痛が爆ぜる。長時間画面を見詰め続けたツケが回ってきた。

眼鏡をはずし、臉を揉む。我ながら爺臭い仕草だとあきれ

「臉を摘みほぐしながら命令すれば、千里が大人しく席を立ち、椅子を引く。

椅子の車輪が床を擦る。

「その必要はありません」

「は？」

間拔けな声を脳天から発し、目をしばたたく。

千里がガラリと開け放った机の引き出し、その中を覗き込み、あぜんとする。

机の一番下、深い引き出しの奥に、ずらつと栄養ドリンクの瓶がならんでいた。

「こんなこともあるうかと常備してたんです」

千里が得意げに胸を張る。

「……開いた口がふさがらねえ。」

「オロナミンC、リポピタンD、アリナミンC、キャベジンF……カローリーメイトとスニッカーズもあります」

「商売できるな」

「じゃなくて。」

「おすすめはキャベジンです」

千里が爽やかな笑顔で中の一本を選び、俺に突き出してくる。

「キャベジンなんか飲めつか。俺はオロナミン一筋なんだよ」

千里が手渡そうとしたキャベジンを拒否し、引き出し一番手前のオロナミンCをひったくる。

蓋を捻った時、違和感があった。

「？」

やけにゆるい。まるで、一回開けてから締めなおしたような……。

抵抗なく回った蓋と瓶を持て余せば、千里が何故か期待と興奮に満ちた目でこつちを見詰めているのに気付く。

「んだよ。気味悪いな」

「遠慮せず、イツキにいつちやってください。まだまだ夜は長いんだから。あ、手拍子しましょうか？」

「余計なお世話だよ。男二人で宴芸かよ、むなしいよ」

「ご相伴に預かります」

引き出しから栄養ドリンクをとり、器用に蓋を捻り、開ける。どうでもいいがこいつ、やけに乗り気だな。

千里が栄養ドリンクをもち、俺を促す。不吉な胸騒ぎを抱きつつ、たかだか栄養ドリンク、ためらうのも馬鹿らしいと吹っ切る。

「乾杯」

千里が高らかに叫ぶ。

栄養ドリンクの茶褐色の瓶が触れ合い、甲高い音を奏でる。同時に口を付け、片手を腰におき、競うように一気に飲み

干す。

飲み干すと同時に瓶を放し、盛大に息を吐く。

「ぶはーつ、まじい。眼精疲労がふつとんで……」  
いかねえ。

ガツン、頭を金槌で殴るように強烈な睡魔が押し寄せ、眼が抵抗のすべなく屈服。

体から一気に力が抜け、四肢が弛緩し、膝から床にへたりこむ。

「……………おか、しいぞ……………オロナミンCは……………眼精疲労にきく、はずじゃ……………」

駄目だ。

明日までに資料を仕上げ提出しなきゃいけねえのに。容赦なく、眠い。

一万匹の羊の大群が土ほこりあげ突進してくる幻が見えた。手から落下した瓶が床を転がっていく。

床にへたりこむ俺の頭上に影がさす。

「……………せん……………り……………てめ……………」

呂律が回らない。

筋肉が弛緩した腕を持ち上げ、千里のズボンを掴み、締る。ズボンを掴んで体をずり起こそうとする俺を相変わらずそこはかとなく黒い笑顔で見下し、優越感を含んだ声で千里が言う。

「キャベジンにしとけばよかったのに」

鼓膜をなでる声が眠気を誘う。

頭の芯からふやけて瞼が垂れ下がっていく。

即効性の睡魔に抗う心に反し、ズボンを掴む手指の力がぬけていく。

床に体が沈む。

椅子が、机が、液晶画面が放つ青白い電光がみるみる遠ざかっていく。

脊髄ごと引き抜かれるような虚脱感に襲われ平板な床に倒れこむ。

頬に床の硬さ冷たさが染みる。

急速に明度をおとしつつある視界に、床の向こうに転がった空の瓶を捉える。

はめられた。

トントントントントン。

八拍子の快音が意識を浮上させる。

『あつ、起きちゃったのズミっち。待ってて、もうすぐご飯できるから。今日は安子特製トンカツだよ』

安子がキャベツを刻んでいる。

左手でキャベツを押さえ、右手に包丁を構え、ご機嫌な鼻歌まじりに千切りにしていく。

俺の嫁さん候補は実によくできてる。

顔よし料理の腕よし……

『でもねえズミっち、安子謝らないといけないことがあるの。トンカツ作ろうとして、下ごしらえの時、間違えて味の素ふっちゃって。あ、いけないって思つて、すぐにシナモンパウダーかけて中和したんだけど、ひよつとしたらちよつと変な味するかもしれない。ごめんね?』

……頭はちよつとたりねえけど。総評して俺にはもつたいいねーいい女だ。

舌足らずな喋りと間延びした語尾に胸苦しいほどの愛しさが込み上げる。

愛情で窒息しそうってこんな感じ?

斜め四十五度に小首を傾げるお茶目なポーズがもう辛抱たまらない。

後ろから忍び寄り抱きしめ、エプロンの脇から手を突っ込んで巨乳をまさぐる。

ああ極楽。

男に生まれてきてよかったと神様と遺伝子に感謝したくなる至福の瞬間。

『もー、悪戯はだめだよ、ズミっち。料理の邪魔だよ』  
柔らかな背中に顔を埋め、軽快な包丁の音を聴き、安堵を覚える。

安子の手際よく新鮮なキャベツを切っていく。

……あれ? 今なにか、意識の隅っこにひっかかったぞ。キャベツ、キャベツ、キャベジン……

安子が突然、俺の腕をすりぬける。

包丁を持ったままくりりと振り返り、お得意の斜め四十五度の小首傾げポーズに加え、庇護欲くすぐる小動物めいた円らな目を潤ませ俺を見る。

『ズミっち。安子ね、内緒にしていたことがあるの』

安子らしくねえ深刻な声に不安がきざす。

とにかく包丁おろせ。こっちに向けんな。

調理用の道具は持ち主の気分次第で殺人の凶器にもなる。

少女趣味なエプロンを羽織った安子が包丁の切っ先を危なっかしくこっちにつきつけ、大粒の涙をためた伏し目で謝る。

『このキャベツね、ズミっちのために刻んでるんじゃないの?』

え?

じゃあだれが食うの?

まな板の脇には大量のキャベツの千切りがこんもり小山を作っている。

キャベツの山を指さし聞けば、安子は申し訳なさそうにうなだれ、ちらりと振り返る。

いつのまにか背後に男が立っていた。



『海外事業部の富樫くん』

今泣いた小娘がもう笑った。

安子は男に腕を絡め、幸福の絶頂で頬ずりしてみせる。

え？ え？

なにこの急展開。

完全においてけぼりだよ、俺彼氏なのに。

混乱する俺をよそに、安子と富樫くんとは臆面もなく  
いちやいちやよろしくやってる。

略奪愛。二股。

俺はただただ呆然と、口半開きの間抜け面で、乳繰り合う  
ふたりを見つめるつきやない。

富樫は可も不可もねえ凡庸な顔立ちの男で、ただ、スーツ  
と靴が、俺より高価そうだった。

いかにもエリートでございってイヤミな光沢を放ってやがっ  
た。

海外事業部。

会社の未来をしょってたつエリートが集まる部署。

安子、いつのまに富樫くんとお近づきに……

『だつてズミっち、将来性ないもん』

安子の言葉が、強烈な痛みを伴い胸に刺さる。

『いつつもかりかりしてるし。安子の話聞いてくれないし。  
最近じゃなに話しかけても邪魔だ、うるさい、あつちいけ

しか言わないし』

ちがう、安子、話を聞いてくれ。俺は疲れてたんだ。連日  
仕事仕事でストレスたまってたんだよ、そう、諸悪の根源  
はストレス社会なんだよ！

不満げに口を尖らす安子に追い縋ろうとするも、安子と富  
樫くんはがっちり腕を絡めていて、遠吠えしか能のねえ負  
け犬がつけている隙などあるはずない。

『安子のお腹にね、富樫くんの子供がいるの』  
衝撃。

右手に脅しの包丁をちらつかせ、左手は優しく腹に添え、  
安子が笑う。

『全然気付かなかつたよね、ズミっち』  
しようがねーだろ、疲れてたんだよ。

言い返せるわけがない。そんな最低の言い訳、吐けるわけ  
がねえ。

恋人が妊娠したのにも気付かず。

安子の話に耳を傾けず、そばにいるのが当たり前になって、  
邪険にあしらつて。

自業自得だ。

不甲斐ない恋人を捨て玉の輿できちやった婚を選んだ安子  
を、責める理屈がねえ。

富樫くんの顔は奇妙にぼやけて目鼻立ちも分からないが、

将来性・俺より上、性格・俺より良、服のセンス・年収比較にならねえときたら、結婚相手にや申し分ない。

完敗だ。勝負する前から勝敗は決まってた。だつて、腹にガキがいるんだろ？

その時点で、対抗心が萎えた。

富樫某から安子を取り返して、どうする？

安子は物じゃねえ。

簡単に奪つたりのし付けて送り返せる安い女じゃねえ。

安子の心はもう俺から離れてる。ガキをやどした女は強い。

俺には富樫から安子を奪い返す度胸も腹のガキと二人まとめて養つてく甲斐性もねえ。

『ごめんさい』

安子が一瞬真顔になる。

ひたと俺を見詰める眼差しは責める色も詰る色もなく、罪悪感に染まつていて。

片手に包丁をぶらさげ、もう片方の手を顔のない富樫に絡めて去つていく。

待て、安子。いかないでくれ。

追う資格はないとわかつていて、つい未練がましく手を伸ばしてしまふ。

トントントントン、単調な音が響く。幻聴、か？ 安子はもうキャベツを刻んでない、包丁はまな板を叩いてないの

に、どうして聞こえるんだ。

キャベツ。

キャベジン。

デジャビユ。

何か思い出しかけた。

何か思い出しそうだ。

こめかみがきりきり痛む。

だれかが俺のこめかみに錐を突っ込んで原始人式に火をおこそうとしてる。

誰だ、人の甘酸っぱい思い出を土足で踏み荒らす無神経な馬鹿は。

もう少しで目の穴鼻の穴から煙が立ちそうだ。

キャベツ・キャベジン・キャベツ・キャベジン・キャベツ……

シュレツダー。

千切り。

そこはかとなく黒く爽やかな後輩の笑顔。

『キャベジンにしとけばよかつたのに』  
千里。

「!! つ、てめ!!」

覚醒と同時に跳ね起きる。

現実に叩き戻され、睡眠薬の余韻で重い頭とだるい体を気

力を振り絞って支え、犯人を捜す。

「三十分と二十一秒か」

耳障りな音が途端に止む。

課長の椅子にふんぞりかえった千里が余裕綽々で頬杖つき、いやらしく目を細めて俺を見下ろしてる。片手の人さし指でカウンタダウンよろしく机の端っこを叩いてたのが、夢に感応した音の正体。

目が合った刹那、背筋に悪寒が走る。

天使のような悪魔の笑顔のフレーズが頭を掠めた。

背広の袖をたくしあげ腕時計を読み、千里が呟く。

「もつと長くかかるかとおもったんですけど、こんなもんか」

「タメ口と敬語がまぎってんで、後輩」

地が出てきやがったな。

凶暴に歯を剥いて唸れば、手に負えねえ駄犬でも蔑むような冷やかさで再び見下される。

「お前、何した？」

単刀直入、核心を突く。

千里が笑う。

「オロナミンCに薬を仕込みました。最近ネットですぐ簡単に手に入るんですね、睡眠薬。錠剤を砕いてすり潰してちよつとだけ」

顔から血の気が引いてくのがわかる。

「今のご時世に薬物混入って、悪魔か。洒落になんねーぞ。だいたい栄養ドリンクに睡眠薬って、その組み合わせ鬼門じゃねえか」

詰る声も自然震える。一歩間違えば俺、今頃この世にいなかったかも。

「鬼門は睡眠薬にウイスキーです。栄養ドリンクなら大丈夫です」

自信たっぷりな断言しちやってるが、その根拠が猛烈に知りたい。

こめかみが疼く。

霞がかった頭を苦勞して持ち上げ、ジーゴジーコと記憶を巻き戻す。

素朴な疑問点。

「千里。俺がオロナミンC選ぶって、わかったのか」

あの時千里は、最初にキャベジンを薦めた。

俺はそれを拒否し、引き出し最前列のオロナミンCをひったくったのだ。

予め用意されてたとしかおもえないそれを。

椅子を鳴らし、深く身をもたせ、足を組む。

「先輩の好きな栄養ドリンクは把握済みです。先輩、オロナミンCしか飲みませんもんね。おまけに僕の事嫌ってる

し、僕が薦めたら絶対断つて、勝手に引き出しからもつてくと計算しました。わざわざ取り出しやすい一番手前に置いてた甲斐があつた、作戦勝ちですね」

……策士め。

ほくそえむ千里をあらん限りの殺意をこめ睨みつける。

「!! おまつ、」

床を蹴り反動つけ、千里に掴みかかろうとして、手首にしこりの違和感。

バランスを崩し、顔面から床に突っ伏す。

転倒のはずみに眼鏡がずれ、辛うじて鼻梁にひっかかる。

「痛ッて……………」

「状況をよく見たほうがいいですよ」

人を食った声とする。

愉悦の笑みを含んだ声に促され、おそろおそろ振り向き、ぎよつとする。

両手を縛られていた。ネクタイで。

「本当は意識がある時にやりたかつたんですけど」

千里が悪戯っぽく首をすくめる。

どういう状況だ、これは。捕虜？ 人質？ 生贄？ 緊縛

ショー？ ……究極の四択じゃねーか。

頭が混乱する。脳が現実を拒否する。

見下ろせば、俺はネクタイをしてない。

出社時も、残業中も、たしかにしていた。

意識を失つてる間にだれかがはずしたんだ。

誰が？ ……消去法で千里しかいねえ。

手首を縛るネクタイはきつく、暴れてもほどけそうにない。

「……………ほどけ」

悪ふざけの域をこえてる。

会社でネクタイを外すことなんかめつたにないせいかな、はだけた襟元が妙に涼しくて落ち着かない。

会社でネクタイを外すのは、深夜の街中で素っ裸になると同じ位、根源的に不安だ。

他の連中はどうか知らねえけど、少なくとも、俺はそう  
だ。

人前でネクタイをほどくのは、抵抗がある。

よそむきの上つ面をひん剥かれ、名伏しがたい羞恥が襲う。シャツの襟が首を擦るささくれた感触が不愉快だ。

糊の利いた襟が鋭敏な素肌をちくちく刺して脈拍を乱す。

「ネクタイしてない先輩ってなんか新鮮。いつもきつちり締めてて、息苦しくないのか不思議だった」

「会社じゃネクタイすんのが礼儀だろ」

「礼儀？ 先輩でも気にするんだ、新発見」

完全になめきつた口調にむかつばらがつ。

敬語も口先だけ、俺に対する敬意と誠意がちつとも感じら

れねえ。

んなもん払うに値しねえってか？ けつ。

ネクタイを抜いた襟元を外気が冷やす。

シャツから覗く素肌に空気が染みる。

シャツの着崩れが気になる。

ネクタイで縛られた手首にしこりを感じる。

手が使えないだけで、ひどく不便で不自由だ。

「最近のネクタイで丈夫ですよね」

俺の胸の内を見抜いたように千里が呟く。

「耐性があつて、しっかりと結べばほら、立派な拘束具になる」

椅子を軋ませ、床に突つ伏した俺の鼻先に革靴の先を向ける。

「自分のネクタイで縛られる気分はどうですか、先輩」

「……………」

「クツジヨクテキキ？」

「死ぬ」

毒が滲んだ調子で唾棄する。

「お前、くるつてるよ。栄養ドリンクに睡眠薬しこんで、気絶してる間にネクタイ縛って……次はなんだ、映画で見た拷問でも試すのか？ 爪きりでわざと深爪させんのか？ セロテープで脛を吊つて、眼球乾かすのか。職場でもでき

るお手軽な拷問、いくらでもあるだろう」

「そんなに怖がらなくても、これまでいじめられたり返しに、先輩の大事な指をシュレッダーにかけたたりしませんて。キー打てなくなっちゃいますもんね。あ、舌でつついて入力する練習します？ 犬みたいに。ブラインド・タン・タツチ、なんてね」

涼しいつらでおそろしいことを言う。想像して、吐き気がした。

おもむろに椅子から腰を浮かす。

革靴の先端がレンズにかちあい、反射的に身を引く。

這つてあとじさる俺の傍らに膝をつき、喉仏に触れる。

「ずっと想像してたんですよ。あのネクタイの下の喉仏は、どういう形をしてるんだらうつて。襟を開いて確かめたかつた」

「……………もしもし、千里くん？」

「もちろん、皆の前では普通にふるまってきましたよ。誰もに愛される無邪気で可愛くちよつとドジな後輩を演じてました。この加減が案外むずかしいんですよ、一線こえちゃうとただのお荷物だし……同期の足を引つ張らない程度にこまごました失敗しつつ、先輩の前では盛大に」

「ちよつと待て。看過できねー発言したぞ今」  
こいつ、もしかしてわざと。

入社半年間、俺の目の届く範囲でだけ、足手まといの困った後輩を演じてたのか？

「今日、書類をシュレッダーにかけたのも……」

「故意ですよ」

生まれて初めて本気で人を殺したいと思った。

「先輩が書類おいてトイレに行くとこ見てましたから。今がチャンスだ！ つてシュレッダーで処理しました。見事な千切りのできあがり」

「殺す絶対殺すホチキスでその舌下唇にとめてパソコンで撲殺する」

「どうぞ。両手が見えるなら」

不可能を見越し、宣言。

「パソコンで結構重たいですよ。持ち上げるだけでも大変。凶器に用いてデータ飛んだら即刻クビでしょうね」

ひしひしと絶望が染みてくる。

今俺、ひよつとして、すつげーやべえ状況なんじゃね？ 110

番しなきゃいけないーたぐいの。

深呼吸で冷静さを吸い込み、噛み付くような目つきで千里をにらむ。

「もう一度言う。ほどけ」

「嫌です」

「ほどけくそつたれ」

「なおさら嫌です」

埒あかねー。

平行線を辿る問答に苛立ちが募る。

床に転がったまま、首だけ上げる体勢は存外辛い。

首筋が突つ張り、筋肉に乳酸がたまる。

手首をしきりと動かし擦り合わせ拘束を緩めようと努めるも、ネクタイは手首にがつちり食い込んで、もがけどあがけど解けない。どころか、募る焦燥に比例して縛す力も強まってくる。

「痛ッ………、」

摩擦で皮膚が熱くなる。

苦痛に顔を顰めた俺の方へ身を乗り出し、喉仏を触る指を下へと移す。

「強引に、脱がしたくなるタイプですよね」

「はあ？」

「スーツを」

倒置法？

いや、その前に。

千里の触り方に、違和感を覚える。

千里は執拗に俺の喉を触る。

喉仏に重点において、まわりの皮膚をなで、呼吸に合わせた筋肉の収縮を確かめる。

露骨にセクシャルで、気持ち悪い触り方。

「千里……………」

呼びかける声に、警戒心が籠もる。

生唾の嚙下に伴い喉を動かし、注意深く、聞く。

「ホモ？」

「ゲイです」

譲れないのねそれは。

いや。

待て。

「……………!!…!!…!!つ、さわん、なぐ!？」

後頭部に衝撃が炸裂。

額が接する近距離に迫った千里から飛びのいた拍子に、背

後の机に頭をしこたま痛打。

危なく舌を噛みそこねる。

いつそ噛んだほうがマシだったかもしれない。

「うわ、痛そ。漫画の擬音みたいに『ごっつん』て鳴りましたよ」

千里がご丁寧に顔をしかめる。

「耳から脳汁でそうだよ……」

誇張じゃなく、悶絶。手を縛られて頭を抱え込めねーから、仕方なく、芋虫のように身を伸縮させ筆舌尽くしがたい痛みを訴える。

ぶつかつた拍子に眼鏡がまたずれた。気を抜けば落つこちそうだ。

「先輩って面白いなあ」

無邪気な笑い声が神経に障る。

俺が七転八倒の苦しみを味わつてる時に薄情な後輩ときたら、呑気に笑つてやがる。

生理的な涙で目がかすむ。眼鏡がずれたせいで、視界の軸が定まらず、ぶれ、悪酔いする。

右に左に傾ぐ頭を立て直そうと努力して

「面白いなあ。犯したいなあ」

シャツの内側に手が滑り込んできた。

俺、今超ピンチ。

絶体絶命危機的状況九死に一生脳髓沸騰。

「まつ、ちよ、まつ、ええつ!？」

現状の異常さに言語中枢が麻痺、呂律が回らず舌を噛む。落ち着け俺、平常心平常心。こういうときは手のひらに人と書いて飲み……こめねえよ縛られてるじゃねーか!

「犯していいですか？」

「駄目だよ!!」

「よし」

「聞けよ!!」

何がよしだ、キャッチボール成立してねえよ。俺の意志完全却下で脳内了解かよ。

アドレナリン過剰分泌でこめかみの血管がいきりたつ。

床でのたうつ俺の胸を千里の手が這う。

着乱れたシャツの内側に忍び込んだ手が、首筋から胸にかけて緩慢に往復。

千里の手が首に吸いつき、胸板にじゃれつく。

両手は使えない。ネクタイできつちり縛られている。

背中に回された手をしきりに擦り合わせ抗うも、結び目は固く、布がきつく手首に食い込む。ネクタイてこんな丈夫だったんだ、現実感が遠のいて冷めた頭の片隅で妙に感心する。

千里の言う通りだ。

手を縛られて痛感したが、ネクタイは存外丈夫な素材で出来ている。ちよつとやさつと暴れたくらいじゃちぎれそうにねえ。一本千円の安物なのにこの丈夫さ、結構お買い得だったんじゃないとせこい考えが脳裏を掠める。

慰めにはまったくならねえ。

「千里、おい千里、このバカ後輩！ 勝手に人のシャツはだけて手え突つ込むな気色悪い！」

「ばかばか言わないでくださいよ、興がそがれるから」

「ばーかばーかばーか！」

「うわ大人げない。二十五歳でこの大人げなさ奇跡。恥ずかしくないんですか、小学生の返しですよ。ボキャブラリー貧困なんだから」

「るっせ、人が気絶してるあいだにしめしめと両手括るよ  
うなゲスはばかで十分なんだよばか」

興をそぐ？ 上等だ、削いでやろうじゃねえか。  
闘志再燃身構える俺を見つめ、ため息をつく。

「ま、抵抗してくれたほうが燃えますけど」

久住宏澄二十五歳、貞操の危機。

落ち着け俺、まずここに至る経緯を振り返ろう。半裸で乳繰られるはめに陥るまでの経緯をひとつひとつ回想しよう、いつどこでだれがどうしたか時間軸を整理しよう。5W1Hは文法の基本だ。

ここは深夜の会社オフィス、俺は後輩の尻拭いで残業中、後輩が好意でさしだした（と、あの時は錯覚した）オロナミンCイツキで沈没、目覚めたら緊縛。

………結論、意味不明。

(以下続)